
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）硝子《ガラス》戸棚

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）中々|気位《きぐらゐ》が高い

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例） [# 「言＋虚」、第4水準2-88-74]

薄暗き硝子《ガラス》戸棚の中。絵画、陶器、唐皮《からかは》、更紗《さらさ》、牙彫《げぼり》、鍍金《ちうきん》等《とう》種々の異国関係史料、処狭きまでに置き並べたるを見る。初夏《しよか》の午後。遙にちやるめらの音聞ゆ。

久しき沈黙の後《のち》、司馬江漢《しばかうかん》筆《ひつ》の蘭人、突然悲しげに歎息す。

古伊万里《こいまり》の茶碗に描《ゑが》かれたる甲比丹《かびたん》、（蘭人を顧みつつ）どうしたね？ 顔の色も大へん悪いやうだが

蘭人、いえ、何《なん》でもありませんよ。唯ちつと頭痛《づつう》がするものですから

甲比丹《かびたん》、今日は妙に蒸暑いからね。

唐皮《からかは》の花の間《あひだ》に止まれる鸚鵡《あうむ》、（横あひより甲比丹《かびたん》に） [# 「言＋虚」、第4水準2-88-74] 《うそ》 [# 「 [# 「言＋虚」、第4水準2-88-74] 」は底本では「謔」] ですよ。甲比丹！ あの人の頭痛ではないのです。

甲比丹《かびたん》、頭痛ではないと云ふと？

鸚鵡《あうむ》、恋愛ですよ。

蘭人、（鸚鵡を嚇《おど》 [# 「嚇」は底本では「嚇」] しつつ）余計《よけい》な事を云ふな！

甲比丹（蘭人に）まあ黙つてゐ給へ。（鸚鵡に）さうして誰に惚れてゐるのだい？

鸚鵡、あの女ですよ。ほら、あの阿蘭陀出来《オランダでき》の皿の中にある。

甲比丹、何時《いつ》も扇を持つてゐる女か？

鸚鵡、ええ、あれです。あの女は顔こそ綺麗ですが、中々|気位《きぐらゐ》が高いものですからね。

蘭人、（再び鸚鵡を嚇しつつ）こら、失礼な事を云ふな！

甲比丹、さうか？ それは気の毒だな。（金象嵌《きんざうがん》の小柄《こづか》の伴天連《ばてれん》に）どうしたものでせう？ パアドレ！

伴天連《ばてれん》、さあ、婚礼はわたしがさせても好《い》いが、何しろ阿蘭陀《オランダ》生れだけに、あの女の横柄《わうへい》なのは評判だからね。

蘭人、どうかも御心配なさらずに下さい。（やけ気味に）いざとなればあの種《たね》が島《しま》に、心臓を射抜《いぬ》いて貰ひますから。

種が島、（残念さうに）駄目《だめ》だよ。僕は鍔《さ》びついてゐるから、サアベル式の日本刀《にほんたう》にでも頼み給へ。

牙彫《げぼり》の基督《キリスト》、（紫壇の十字架上に腕をひろげつつ）無分別《むぶんべつ》な事をしてはいけない。ふだん云つて聞かせる通り、自殺などをしたものは波群葦増《はらみそ》の門にはひられないからね。（麻利耶《マリヤ》観音《くわんのん》に）お母様《かあさま》！ どうかしてやる訳には参りませんか？

麻利耶《マリヤ》観音、さうだね。ではわたしが頼んで見て上げようか？

伴天連、さう願へれば仕合せでございます。

甲比丹、どうか御尽力を願ひたいと存じますが、（蘭人に）君からもおん母に御頼みし給へ。

蘭人、（恥しげに）何分《なにぶん》よろしく御願ひ申します。

鸚鵡、御恵《おめぐみ》深い麻利耶《マリヤ》様！ わたしからもひとへに御願ひ致します。

麻利耶観音、（阿蘭陀《オランダ》の皿に描《ゑが》かれたる女に）あなた！

阿蘭陀《オランダ》の女、何か御用ですか？

麻利耶観音、はい、実はこの若い方《かた》があなたを御慕ひ申してゐるのださうですが、

阿蘭陀の女、まあ嫌《いや》です事。わたしはあの方《かた》は大嫌ひでございます。

麻利耶観音、それでも体さへ糞《やつ》れる程、思ひ悩んでゐるやうですから、

阿蘭陀の女、それはあの方の御勝手《ごかつて》ではありませんか？ 一体わたしは日本出来や支那出来の方《かた》は虫が好かないのです。

麻利耶《マリヤ》観音《くわんのん》[#ルビの「くわんのん」は底本では「くわんの」]、そんな事を云ふものではありません。あの方もあなたと同じやうに、西洋文明の命の火を胸の中に宿してゐるのですもの。云はば兄弟のやうなものではありませんか？ どうかわたしたち親子も願ひますから、少《すこ》しは可哀《かはい》さうだと思つてやつて下さい。

阿蘭陀《オランダ》の女、（腹立たしげに）余計《よけい》な事は仰有《おつしや》らずに下さい。第一あなたさへ平戸《ひらど》あたりの田舎《ゐなか》生れではありませんか？ 硝子《ガラス》絵の窓だの噴水だの薔薇《ばら》の花だの、壁にかける氈《かも》だの、そんな物は見た事もありますまい。顔もあなたはわたしの国のおん母 | 麻利耶《マリヤ》とは大違ひです。ましてあの方《かた》を御覧なさい。成程《なるほど》あの方もこの国では、阿蘭陀《オランダ》人と云ふかも知れません。しかしほんたうは阿蘭陀人どころか、日本人とも西洋人ともつかない、つまりこの国の画描きの拵《こしら》へた、黒ん坊よりも気味の悪い人です。

蘭人、ああ、何と云ふ情《なさけ》ない言葉だ！（涕泣《ていきふ》す）

阿蘭陀の女、（なほ怒の静まらざる如く）それがわたしを慕つてゐる、よくまあそんな事が云はれたものです。おまけにあの方の一家一族 長崎画《ながさきゑ》に出て来る紅毛人《こうもうじん》も皆同じ事ではありませんか？ あたしはあの人たちの顔を見てさへ胸が悪くなつて来る位です。

長崎画《ながさきゑ》の英吉利《イギリス》人、法朗西《フランス》人、露西亜《ロシヤ》人 | 等《ら》、（驚きし如く）おお！ おお！

麻利耶観音、ではどうしてもあの方とは仲好く出来ないと云ふのですか？

阿蘭陀の女、当り前です。わたしはもう今日《けふ》限り、あなたとも御つきあひは御免《ごめん》蒙《かうむ》りませう。古伊万里《こいまり》の甲比丹《かびたん》、小柄《こづか》の伴天連《ばてれん》、亀山焼《かめやまやき》の南蛮女《なんばんをんな》、いえ、いえ、それどころではありません。刀の鍔《つば》にゐる天使でさへ、二度と口を利《き》いて貰ひますまい。あの人たちとわたしとは生れも育ちも違ふのですから、

麻利耶観音、（蘭人に）聞いてゐたらうね？ わたしの言葉さへ通らないのだから、所詮《しよせん》お前の願ひはかなはないよ。

蘭人、（涕泣《ていきふ》しつつ）はい、もう仕方はございません。

甲比丹《かびたん》[#ルビの「かびたん」は底本では「かぶたん」]、男らしくあきらめるさ。（亀山焼《かめやまやき》の南蛮女《なんばんをんな》に）しかし憎い女だね。

南蛮女《なんばんをんな》、ほんたうに高慢な人です事。ようございますよ。これからはわたしがあの方の代りにこの方《かた》の世話をしますから。

伴天連《ばてれん》、お前さんは何時《いつ》もやさしい人だ。

基督《キリスト》、静かに！ 静かに！ 誰か人間が来たやうだから、

鸚鵡《あうむ》、しつ！ しつ！

この家の主人、数人の客と共に戸棚の外に立つ。

主人、これがわたしのコレクション[#「ヨ」はママ]です。

客の一人《ひとり》、大分《だいぶん》沢山《たくさん》ありますね。この江漢《かうかん》の蘭人は面白い。

主人、其処《そこ》にあるのは亀山焼です。これはわたしの自慢の品ですが、

客の一人、南蛮女ですね。阿蘭陀《オランダ》出来の皿の女より、余程《よほど》美人ではありませんか？

主人、これですか？（阿蘭陀の女のゐる皿を取り出す）おや、何か濡れてゐるが、

客の一人、まさか阿蘭陀の女が泣いたと云ふ訳でもありますまい。

客の他の一人、いや、悪口《わるぐち》を云はれたから、口惜《くや》し泣きに泣いたのかも知れません。（笑ふ）

客の一人、一体日本出来の南蛮物には西洋出来の物にない、独得な味がありますね。

主人、其処《そこ》が日本なのでせう。

客の一人、さうです。其処から今日《こんにち》の文明も生れて来た。将来はもつと偉大なものが生れるでせう。

客の他の一人《ひとり》、この蘭人や南蛮女も亦以て瞑《めい》すべしですか。 おや！

主人、どうしたのですか？

客の他の一人、何だかあの基督《キリスト》が笑つたやうな気がしたのです。

客の一人、わたしは麻利耶《マリヤ》観音《くわんのん》が笑つたやうに見えた。

主人、気のせみでせう。

主客《しゅかく》静かに硝子《ガラス》戸棚の前を去る。再びかすかにちやるめらの音。

[# 地から 1 字上げ] (大正十一年五月)

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社

1965 (昭和40) 年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2004年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。